



妊娠と薬

妊婦さんにとっては、自分が飲む薬が、生まれてくる赤ちゃんにどのような影響を及ぼすかはとても不安です。「妊娠していることに気づかず、風邪薬を飲んでしまった」と慌てる人も多いことでしょう。妊娠中は赤ちゃんを守るために、いろいろな臓器の働きが健康な人比べて弱くなりがちです。そのため妊娠中に薬を飲むと普段より副作用が強くなってしまふことがあります。



今回は妊娠と薬との関係についてまとめてみました。

| 妊娠時期 | 薬剤の影響 |
|---------------------------|---|
| 妊娠 1 カ月前後 (0~3 週目) | 薬を服用しても影響はないと考えられる時期。 |
| 妊娠 2 カ月前後 (4~7 週目) | 【絶対過敏期】さまざまな器官が作られるため、最も薬の影響を受けやすい重要な時期。 |
| 妊娠 3~4 カ月前後 (8~15 週目) | 【相対過敏期】絶対過敏期よりは危険性は低くなるが、外性器や口蓋が完成する時期なので、奇形などの心配はある。 |
| 妊娠 5 カ月~分娩まで (16 週目以降) | 器官の形成はほぼ終了しているため、ほとんど奇形の心配はないが、胎児毒性が問題となる。胎児の発育が低下したり、羊水が減少したり、胎児死亡が起こることがある。 |

妊娠中に薬を飲まなくても、先天異常をもって生まれてくる確率は全体の 2~3%あると言われます。先天異常の発生率を高めるような危険な薬はごく一部だけです。

胎児に奇形を作る作用や胎児の発育や機能に悪い影響を与える作用については、厳重なチェックが行われ、催奇性の強い薬は発売されません。(抗がん剤など一部の薬をのぞく)

必ず安全というわけではありませんので、不必要な薬は飲まないようにしましょう。妊娠中やその可能性のあるときは、市販薬を購入した場合も含め、必ず医師や薬剤師に相談しましょう。

また、妊娠をいち早く知るために、日頃から基礎体温をつけることも大切です。



妊娠に気づかずに飲んだ薬は？

もし、妊娠に気づかず薬を服用したとしても、必ずしも危険性が高いわけではありません。自分で判断せず医師または薬剤師に相談しましょう。

病院から処方される薬には妊娠中に禁止されているものもありますが、危険度のレベルは、薬によりまちまちで、本当に危険度の高い薬は、ほんの一部です。



※市販薬を購入したときは、添付文書の「使用上の注意」欄に“妊婦への投与”についての記載がないかをチェックしましょう。妊娠中に飲んではいけない薬は冒頭の「禁忌」という欄にも記載されています。

治療中の病気がある場合は？

妊婦さんが持病を抱えている場合、飲まないことで体調を悪化させることのほうが心配なので、自己判断で中止しないようにしましょう。特に、糖尿病や高血圧、喘息などの慢性疾患では、症状をコントロールするために薬が欠かせない場合も多くあります。薬を服用中で妊娠を望む場合は、主治医

とよく相談し、計画的に妊娠を考えることが大切です。



薬について心配・不安がある時は？

赤ちゃんに何らかの異常があったとき、両親は「何が原因だったのだろうか？」という疑問に苛まれがちです。もしも妊娠中に薬を飲んだことがあれば、たとえ医学的に否定されてもその薬を疑いたくなるのは当たり前のことです。だからこそ不必要な薬の服用は避けるべきですが、逆に既に薬を服用してしまったからといって中絶を考えるなど過剰に心配しすぎるのもよくありません。

妊娠中の薬について心配なことがあるときは、まず医師か薬剤師に相談しましょう。

厚生労働省事業の「妊娠と薬情報センター」

(<http://www.ncchd.go.jp/kusuri/index.html>) も無料で利用できますので活用してみてください。

(お薬 110 番 / 「薬局」2015年1月号 /
日本産婦人科医会 参照)



オーロラ薬局 盛岡店

TEL 019-635-1233

FAX 019-635-4555

オーロラ薬局 沼宮内店

TEL 0195-61-3883

FAX 0195-62-6868

オーロラ通信はホームページでもご覧になれます。

<http://www.iwate-aurora.com/>